

「待つ」「追い込む」「つなぐ」授業で 生徒にとことん考えさせる

高知県 四万十町立窪川中学校

四万十町立窪川中学校は、5年前から言語活動を意識したグループ活動を軸に授業を展開し、生徒同士の学び合いを大切にしてきた。その結果、生徒の自己肯定感が高まり、互いを認め、雰囲気生まれ、学校全体が落ち着いてきた。更に学力の向上にも成果が表れてきている。

生徒の現状

- 以前は荒れていたが、「学び合い」の導入により、生徒は落ち着きを取り戻している
- 勉強が苦手な生徒や意見を十分に出せない生徒が、まだ「学び合い」に参加しきれていない

取り組みの基本的な考え方

- 「学び合い」を通して、温かい学級集団をつくる
- 1人では解決できないような難易度の高い課題を与え、「学び合い」を行うことで生徒一人ひとりが課題に向き合い、思考力を高める機会をつくる

取り組みの概要

- 授業を2段階で構成。前半は「個人作業の共同化」による基本事項の習得。後半は「背伸びとジャンプ」による質の高い学びを目指す
- 「待つ」「追い込む」「つなぐ」など、生徒のつばきや意見を大切に、それらをつないだ柔軟な授業展開を行う

取り組みを続けるポイント

- 毎年4月に職員全員で「協同的な学び」の理論を基礎から学習しなおし、目指す指導法を確認、見直す機会をつくっている
- 「学び合い」を共通言語に、発問の仕方や発言のつなぎ方によって、生徒が深く考えていたかを教科を超えて議論し合う授業研究の場をつくる

School Data

◎1974（昭和49）年に6つの中学校が統合して開校。2008～10年度は県の「学力向上のための重点支援事業」、09年度には県の「目指せ！教育先進校応援事業」の指定を受ける。



校長◎勝間 慎先生

生徒数◎336人 学級数◎13学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒786-0011 高知県高岡郡四万十町香月が丘 8-18

TEL◎0880-22-0020

URL◎<http://www.kochinet.ed.jp/kubokawa-j/>

公開研究会◎2011年10月5日（水）

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

グループ学習によって 学校の落ち着きを取り戻す

6年前、四万十町立窪川中学校は荒れの真ただ中であつた。チャイムで行動できない生徒や授業に出ない生徒がいて、落ち着いて授業が行える環境とは言い難かつた。そうした状況を打破するため、2007年度の校内研究テーマを「活動的で、協同的で、表現的な授業づくり」とし、グループ学習を中心とした学び合いの一形態である「協同的な学び」(*)を参考にしながら授業改善に取り組み始めた。教頭の下谷達也先生は、当時を次のように振り返る。

『『どうにかして学校を変えたい』という強い思いが根底にありました。そのためには授業を変えることが必要と考え、研究主任が先進校に視察に行き、私たちが本を読み、教師が生徒役になる模擬授業を行って自分たちで体験しながら、手探りの状態で始めました』

当時3学年担任で、現在は研究主任の本山真美先生は、授業のたびにグループ学習を行うことによって、次第に生徒自らが、その良さに気付き始めたと話す。

「自分一人では分からないことでも、4人で話しながら考えれば答えを見つけれられることに、生徒は気付いたようです。ある時、少し難しい課題を出したところ、生徒から『グループで考えていいですか』という声が上が

りました。私自身はそれをグループ学習の課題にしていなかったのですが、生徒は自分たちで話し合いを始めたのです」

授業にきちんと参加しない生徒がいると、話し合いをしながら進めるグループ学習は成立しにくいと思われやすい。しかし、本山先生は、そうした状況だからこそ、少人数で行うグループ学習が生徒を授業に戻す有効な手段になると強調する。

「当初、『生徒は荒れている生徒がいるから授業が進まないと思っている』と考えていました。しかし実際には、生徒は『授業がきちんと進まないのは先生がしっかりしないから』と思っっています。グループ学習にしても、授業を妨げるような行動をしていたクラスメートを仲間外れにするようなことは決してせず、生徒たちは自然に受け入れていました」

また、下谷教頭は、授業にあまり出ていなかった生徒にとっても、4人でのグループ学習は参加しやすい要素があると話す。

「人数が少ないので、黙っていても『どう思う?』と尋ねられ、分かるうが分かるまいが発言しなければなりません。意見を言えば、他の生徒はきちんと聞いてくれるので、自分も他人の意見を聞くようになる。そうした言語活動の積み重ねによって、生徒は教室に自分の居場所があると感じるようになっていったようです。授業に参加しない生徒はほとんどいなくなりました」



四万十町立窪川中学校校長
勝間 慎 Katsuma Shin
「教師全員で同じ方向を向いて指導に当たするために、先生たちを支援していきたい」



四万十町立窪川中学校教頭
下谷達也 Shimotani Tatsuya
「地域から信頼される学校を目指し、信頼される人間を育てたい」



四万十町立窪川中学校
本山真美 Motoyama Sami
研究主任、国語科担当。「生きる力に付けて、中学校を卒業させたい」

学力調査の活用問題の 正答率が大きく伸びる

「生徒同士が話し合うグループ学習」を授業に取り入れてから、教室の雰囲気は大きく変わった。それと共に、教師の意識と指導法も変わっていった。協同的な学びを核にした授業改善の校内研究を重ね、09年度には高知県の「目指せ！教育先進校応援事業」の指定を受けたことで研究にも弾みがついた。同年に赴任した勝間慎校長は、先進校への視察が教師の目標意識を高める契機になったと話す。

「先進校の視察では指導法を学ぶだけでなく、その学校や生徒の柔らかく落ち着いた雰囲気が大いに刺激を受けました。目指したい学校像、生徒像を実際に見て、肌で感じるこ

* 生徒同士を関わらせ、互いの意思をつないでいく手法。同校では東京大大学院の佐藤学教授が提唱する方法を取り入れている

とで、協同的な学びを進めている自分たちの方向性は間違っていない、このまま推進していこうという意識を持ってました」

取り組みの成果は、生徒と学校の落ち着きを取り戻すだけにとどまらず、生徒の学力向上にも表れ始めた。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、取り組みを始めた2年後の09年度調査で、国語のA・B問題、数学のB問題の正答率が全国平均を初めて上回った。勝間校長は、この変化を次のように評価する。

「特に、国語も数学もB問題の正答率が大きく伸びたのは、グループ学習でとことん考えさせている結果だと分析しています。グループ学習によって授業にしっかりと取り組ませる。これが学びの保障に結び付いていることを証明でき、教師の自信になりました。ただ、学習への苦手意識が特に強い生徒や自分の意見を十分に出せない生徒も多くいます。こうした生徒を学び合いに参加させ、更なる学力向上を図ることが課題です」

生徒の発言を丁寧につなげ 思考を促す

窪川中学校では、授業で生徒に考えさせるために「待つ」「追い込む」「つなぐ」の三つの指導を大切にしている。

『待つ』のねらいは、生徒一人ひとりが内省する時間をつくり、考えを深めさせること

にあります。生徒が発言に困っていると、教師は何らかの助言をしたくなるものです。しかし、あえて生徒に『沈黙』を与えて、自分の頭で整理するまで待ち、深く考えるように促しています。教師が粘り強く『待つ』ことで、生徒同士の助け合いが生まれます。生徒を信じて待つことが大切です（本山先生）

「追い込む」には、生徒の発言に対して「なぜ」と迫り、その発言や考え方に至った理由や過程を、生徒自身に深く考えさせたいというねらいがある。生徒にただ発言させて終わるのではなく、その発言に対して教師が「問いかけ」を重ねることで、生徒をより高く、本質的な課題に導いていけるといえる。ただし、生徒を「追い込む」課題や発問を投げかけることは容易ではない。

「教師がどれだけ教材研究をしているかが一番のポイントとなります。設定する課題に迷った時は、同じ教科の先生に相談しています」（本山先生）

「つなぐ」には、一人の生徒の発言やつぶやきを、学級全体で取り上げ、問い返し、生徒一人ひとりに考えさせるといふねらいがある。教師の言葉だけでなく、生徒の疑問や発問を丁寧に拾い、つなげていくことで、生徒の理解を促したり、思考をより深めたりすることが出来るという。

「一人の生徒を当てて答えさせるだけでは、学びはそこで止まってしまい、せつかくのグ

ループ学習の良さを生かすことが出来ません。生徒の発言を受け止め、学級全体に広げていく。それが教師の指導力が問われる場面でもあります」（下谷教頭）

一人では解けない課題で 生徒に考えさせる

更に、同校ではグループ学習を活性化させるために次のような工夫をしている。

①2段階の課題を提示

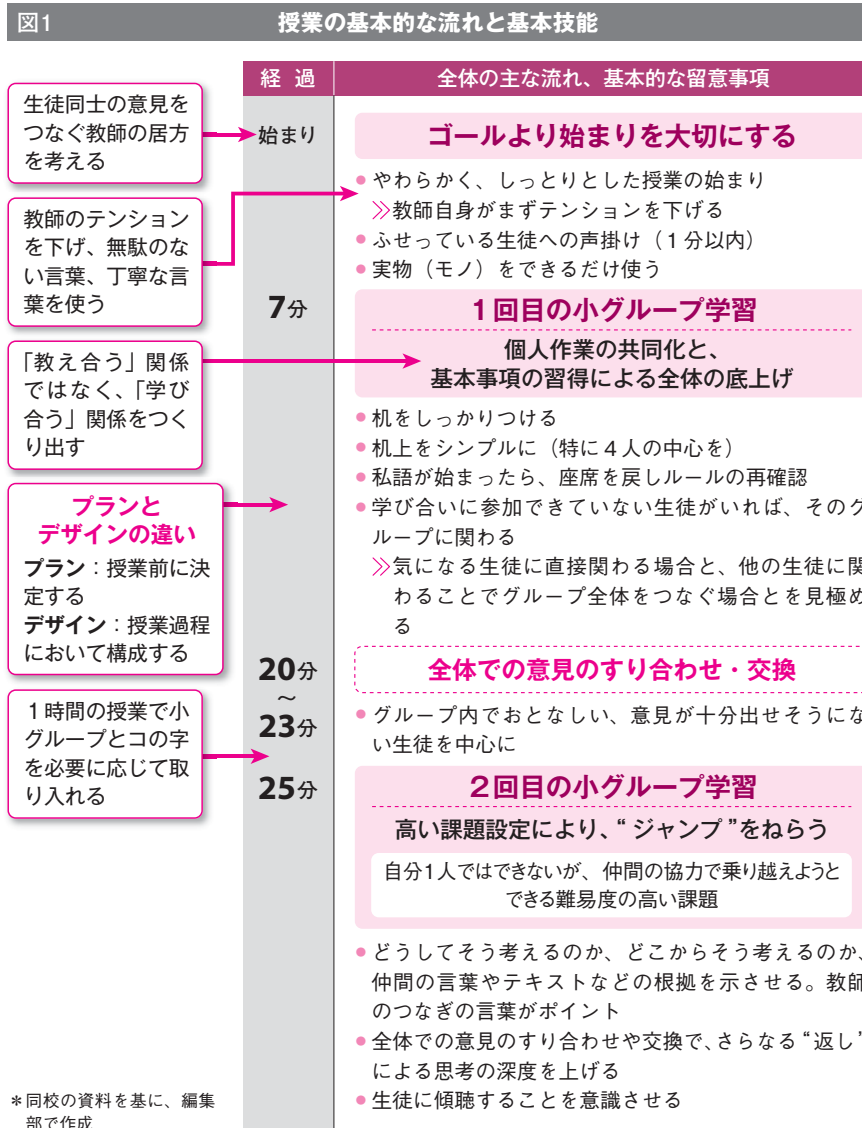
授業の基本的な流れを示したものが図1である。

1回目のグループ学習は、ワークシートの問題を解くなど、本来なら一人で取り組む作業を、4人で机を向かい合わせに行う。基本的には個人作業だが、互いに話しやすい状況にし、分からない生徒は友だちに説明してもらうことで理解を深め、分かる生徒は友だちに説明することで理解の定着を図る、というねらいがある。

2回目のグループ学習は、「ジャンプ課題」として、学力上位層の生徒でも一人では解決できない課題を提示し、グループで考えて答えを見付ける活動を行う。

『ジャンプ課題』では、生徒が相当難しいと感じる課題を出すこともあります。生徒の反応を見て難易度が高すぎると感じたならヒントを出しますが、難易度が低すぎると答えがすぐ出てしまい、話し合いになりません。学

言語活動で授業を捉えなおす



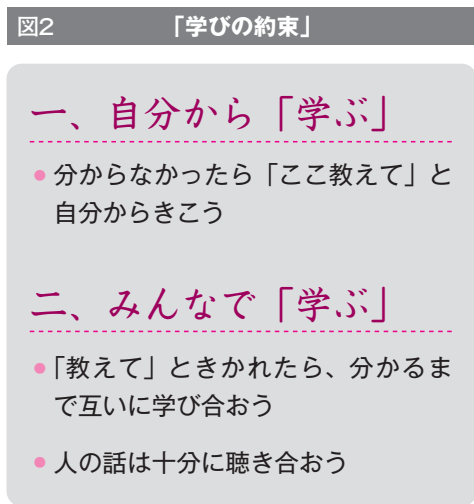
力下位層の生徒は答えを出せなくても、話し合いの過程で答えに結び付くことは言える」と、達成感や自己肯定感を得ることが出来る」（本山先生）

グループ学習中、教師はグループを回りながら生徒の発言を聞き取り、その後の全体学習でその意見を伝えて学習を深めていく。どのような発言があっても授業を進められるように、生徒の発言を想定しておくことも重要だ。

②「学びの約束」を掲示し、意識させる

「学びの約束」(図2)を黒板の上に掲示し、生徒に意識させている。

「大勢の前だと発言しづらい生徒でも、隣の生徒には自分の意見を言えることがあります。グループ学習では意見交換が大切であることを強調し、他人の意見でも自分の考えとすり合わせて、自分の意見としても良いと伝えていきます」



* 同校の資料をそのまま掲載

こうした姿勢が浸透した結果、学力上位層の生徒が下位層の生徒に教える姿がよく見られるようになったという。

「学力の高い生徒は、他人に分かるように教える過程で、だんだんと教え方を工夫するようになります。これもグループ活動における言語活動の一つといえます。教師にとつては、分からない生徒を教えてくれることによつて、効率的に授業が進められるという利点もあります」（本山先生）

③座席は男女の市松模様とする

学級の座席はコの字型を基本とし、男女が市松模様になるように配列（P.24写真）。4人のグループ学習で机を寄せ合った時に、男女がクロスになるようにしている。

取り組みを始めた当初は、話し合いが活発になるように、教師が生徒同士の人間関係を



写真 2年生の国語の授業の様子。座席はいつもコの字型で、グループ学習の時は4人ずつで机を合わせる。生徒のかばんは全てロッカーに置き、机を合わせやすいようにしている

考慮して座席を決めていた。現在は、どんな座席であっても、話し合いはスムーズに進むようになった。

ベテランが先頭に立ち 教師も学び合う集団に

こうした取り組みを支えるのは、校内研究だ。毎年4月になると、教師全員で協同的な学習の理論を基礎から学習するようにしている。他校から赴任した教師の大半は協同的な学びの経験がないため、同校の指導法をつかむ機会として位置付ける。以前から在籍している教師にとっては、基本を学び直し、今までの指導を見直す機会と位置付けている。

研究授業は年6回以上行い、当日のうちに事後研究会を開いて生徒の様子を中心に話し合う。教科内容に関する気づきや助言すべき点があれば、研究会とは別に直接、授業者に伝えるようにしている。

「教師の発問の仕方や、生徒の発言の拾い方、間の取り方など、教師と生徒のやり取りや生徒同士の様子などを見取り、意見を出し合っています。教科の枠を超えて、活発な話し合いになっています」（下谷教頭）

勝間校長は、それを「教師同士の学び合い」として評価する。

「職員室でも、先生たちが授業での生徒の様子を伝え合い、課題設定について意見交換をしている姿が見られます。ベテラン教師ほど自分の指導スタイルを変えにくいものですが、本校では50代の教師が先頭に立って研究に取り組み、指導をよりよくしようとしています。学び合いを教師自らが体験してこそ、授業でも実践できるのではないのでしょうか」

研究授業は、教育委員会や町内の小・中学校にも案内を送り、なるべく多くの人たちに見てもらおうようにしている。これは生徒指導にも大きな成果を見せている。

「教室が汚くても平気だった生徒たちが、研究授業の前に自ら掃除をするようになり、だらしなかつた服装をきちんと整えるようになりました。少し早く来校された先生方がその姿を見て褒めてくださいました。生徒たち

勝間校長が考える言語活動

本校では、グループ学習の一環として言語活動を行っています。グループ学習では、意見を聞く機会と発言する機会が一人ひとりに必ずあります。だからこそ、生徒は誰の発言に対しても聞く姿勢が持て、自分の考えを遠慮なく発言できるようになったのだと思います。勉強が苦手な生徒や気が弱い生徒も、友だちに認められる場を自然とつくることができます。この繰り返しによって、生徒の間に他者を認める気持ちが生まれ、弱い者いじめが少なくなっていきました。言語活動は、最終的には生徒一人ひとりに学力を付けることが目的ですが、学校の雰囲気づくりにも大いに貢献しています。

が変わる、大きな契機となりました」

協同的な学びは5年目を迎え、学校の雰囲気の変化や学力向上という成果を得た。勝間校長は今後の課題を次のように話す。

「11年度はピンチであり、チャンスでもある年だと捉えています。学校は落ち着いて来ましたが、研究開始当初からいた教師の数人が異動しました。この1年を教師全員でしっかりまとまって取り組めば、今後10年は落ち着いた学校でいられると思います。油断をしたら昔に戻るといふ危機感を持ち、生徒に丁寧に関わって指導していきたいと思えます」

言語活動で授業を捉えなおす

図3 授業研究会の例 2年生国語

授業テーマ 聴くこととつなぐこと
学習内容 類義語、対義語
ねらい ①類義語の使い分けと対義語の意味や役割について理解する
 ②類義語や対義語の存在理由を考える
 ①は全員につけたい力、②はジャンプによってつけたい力

◎授業の流れ T: 教師 S: 生徒

■導入

類義語、対義語という言葉について確認する

T 「今日の学習テーマは、類義語と対義語です。教科書を開いて黙読しましょう」

生徒たちは黙読する

T 「では、類義語の『類』にはどんな意味があると思いますか。分からなければ、隣の人と話してみてください」

生徒は隣同士で話し始め、教室がざわつく

S 複数 「種類の類」「類似」などの言葉が挙がる

T 「なるほど、似ているという意味がありそうですね。では、対義語の『対』にはどんな意味がありますか」

S 複数 「反対」「対」という言葉が挙がる

T 「では、両方にある『義』にはどんな意味があるのでしょうか」隣同士の話し合いを促すものの、生徒の手が挙がらないので教科書の黙読を促す。再度、生徒に発問を投げ掛ける

■グループ活動

机をコの字型から4人で机を寄せ合う形にし、4人グループで音読とワークシートに取り組み

T 「類義語は意味が似ている言葉、対義語は意味が反対の言葉ですね。では、グループで音読して、ワークシートに取り組みましょう」

生徒は一斉に教科書の音読を始める。続いて、ワークシートに取り組み。初めは個人で取り組んでいるが、次第にあちこちで話し合いが起こる。グループで話しても分からない場合、教師を呼んで質問する

■全体活動

◆ワークシートの課題1の答え合わせと話し合い

机をコの字型に戻し、課題1の答えを、生徒が発表

T 「磨いてと拭いては、どう違うと思いますか。言葉を入れ替えても大丈夫だと思いますか」

少し間があったあと、一人の生徒が挙手

S 「磨くは表面をつややかにする、拭くは表面に付いているものを取り除く、という意味の違いがあるから、入れ替えたら不自然になると思います」

◆ワークシートの課題2の答え合わせと話し合い

課題2の答えを、生徒が発表

T 「どうして、その言葉が入ったのでしょうか」

S 「良いだから悪い、行きだから帰りました」

T 「文全体が対比的な表現だからですね」

◆ワークシートの課題3（ジャンプ課題）を投げ掛ける

T 「あす、あした、みょうにちは類義語ですが、どういう意味の違いがあるかグループで話し合いましたか」

いがあるかグループで話し合いましたか」

S 「……」生徒の反応が悪く、発言がない

T 「どんな場面で使い分けるか、考えてみてください」

生徒の何か言いたそうな表情を見て、教師はその生徒に発言を促す

S 「あすとみょうにちは改まった言い方で、あしたはどんな場面でも使います」

T 「ほかに意見はありますか」

S 「みょうにちは尊敬語みたいに使う」

T 「この三つを漢字で表すと、そうだね、『明日』と一つになるね。でも、なんで三つの言い方があるのだろう」



グループ学習の様子

■まとめ

類義語と対義語がある意義を説明する

T 「英語だと tomorrow と一つしかないのに、なぜ日本語では三つも言い方があるのか。次までの課題とします」

◎事後研究会での発言

授業者

「あす、あした、みょうにちの違いの説明をジャンプ課題としましたが、言葉の意味や使い分けを説明するのは難しかったようです。しかし、それが国語の目指すところでもあるので、生徒から説明が出てくるのを待ちました」

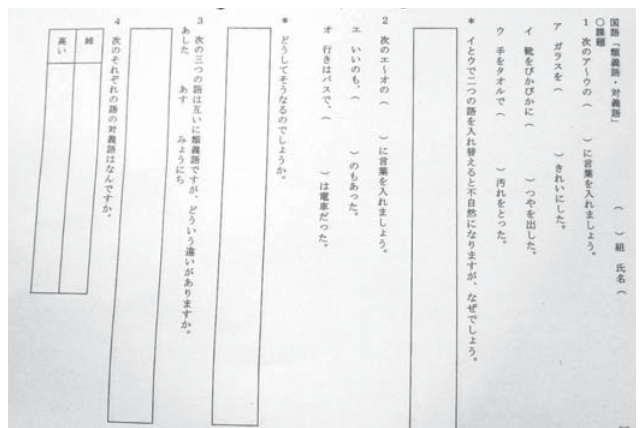
その他の教師の発言

「課題1、2は生徒にとって簡単だったようです。例題は複数あってもよかったのではないかと思います」

「全体活動で、答えが出てこない場合、例文を提示しても良かったのではないかと。生徒が考えるきっかけになると思います」

「あす、あした、みょうにちの違いで、活動が止まっていたので、もう一度グループ活動を入れても良かったのでは？ グループにすればつばやきも増えます」

「生徒からの発言が少ない場面でも、先生は生徒から発言があるまでよく待ったと思います。私なら答えを言ってしまおうと思いました」



本時で使用したワークシート